
俺（僕）の神様！？

走りたくない人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺（僕）の神様！？

【Nコード】

N6284X

【作者名】

走りたくない人

【あらすじ】

ある日俺は、コンビニに行ったら変な店員にいかにも怪しげなジュースを

無理やり買わされ、仕方なくそのジュースを飲んだらいきなり目の前に神様が現れた・・・「ん？、こいつさっきいた変な店員・・・

・・・」そう

呟いた瞬間神様が言う、「ゴメン異世界に逝ってクレ」その時俺は神様が悪魔に見えた・・・

「主人公・キャラクター設定」

「主人公・キャラクター設定」

「主人公」

元名前：折原 達也

現名前：フェイ・リス・フロディア

・元年齢：15歳

・現年齢：15歳

・髪の色：銀

・瞳の色：青（透き通った）

・身長：175cm

・属性：なし

・魔具：なし

・性格：鈍感、優しい、冷静、二面性（俺、時々僕）

・設定：美形すぎる（美形の中の美形）、成績は、毎回一位を取る
くらいの秀才

属性を全部使える、主人公の魔力には、誰も敵わないほど
魔力をもっている

「主要人物」

名前：ミズキ・セラザス

・年齢：15歳

・身長：170cm

・髪の色：水色

- ・瞳の色：ウォーターブルー
- ・属性：水
- ・魔具：銀の杖

- ・性格：明るい、元気、お人好し、照れ屋
- ・設定：フェイ（達也）の幼馴染、かなりの美形、テストの成績だけ、悪い、魔法は得意

名前：エレナ・ウオズリー

- ・年齢：15歳
- ・身長：168cm
- ・髪の色：茶色
- ・瞳の色：セピア
- ・属性：地
- ・魔具：大地の杖

- ・性格：お嬢様、上品、天然、気使い屋
- ・設定：ミズキに並ぶ美形、成績優秀（魔法とも）、どっかの財閥のお嬢様

名前：ユリ・アミュレス

- ・年齢：15歳
- ・身長：164cm
- ・髪の色：紫色
- ・瞳の色：パープル
- ・属性：風
- ・魔具：風の杖、本

- ・ 性格：人見知り、恥ずかしがり屋、本がないと落ち着かない、親しい人としかがあまり話さない
 - ・ 設定：いつもは、前髪で顔がよく見えないが、前髪の下は美形（二人に並ぶ）、（本が友達）、
- 成績は、図書館の本を全部読んでしまったので、いつもトップ（魔法ともに）

主人公・キャラクター設定（後書き）

次にサブキャラ紹介します

どんどんストーリーをすすめていきます!!!

もしかしたら、更新遅れるかもです（>><）
でもガンバッテ更新します!!!!!!

ハサブキャラクター紹介

ハサブキャラクター設定

名前：マリア・フロディア

・年齢：25歳

・身長：165cm

・髪の色：金髪

・瞳の色：金色

・属性：光

・魔具：光の杖

・性格：何事にも動じない、夫×息子 LOVE（息子の方が好き）、怒るとハンパない

・設定：世界最強と言われた魔術師、主人公の母親、美女

名前：ロイド・フロディア

・年齢：29歳

・身長：179cm

・髪の色：黒

・瞳の色：深黒

・属性：光

・魔具：魔剣

- ・ 性格：おおざっぱ、妻 LOVE 、たまに真剣
- ・ 設定：世界最強と言われた剣術師、主人公の父親、美男

名前：シエリル・オーギスト

- ・ 年齢：27歳
- ・ 身長：173cm
- ・ 髪の色：薄赤
- ・ 瞳の色：赤色
- ・ 属性：火
- ・ 魔具：炎の杖

- ・ 性格：面倒くさがり、だらしない、たまゝに真剣（戦闘時だけ）
- ・ 設定：そこそこ強い、フェイ達の教師、ロイドの弟子

名前：リオン・クレイデス

- ・ 年齢：15歳
- ・ 身長：174cm
- ・ 髪の色：薄緑
- ・ 瞳の色：エメラルドグリーン
- ・ 属性：闇
- ・ 魔具：闇の杖

- ・ 性格：礼儀正しい、坊ちゃん、人懐こい
- ・ 設定：どっかの財閥の坊ちゃん、フェイの親友、エレナの幼馴染
- × 許婚、学園長の孫

成績優秀

名前：セロン・クレイデス

・年齢：64歳

・身長：156cm

・髪の色：深緑

・瞳の色：エメラルドグリーン

・属性：風

・魔具：魔樹木の杖

・性格：マイペース、おじいちゃん、真剣になると人格が変わる

・設定：セシル学園の学園長、リオンの祖父、ロイドの師匠、魔力は、ものすごい量

ハサブキヤラクター紹介ヱ（後書き）

この後、ストーリーが始まります！

ヨロシク！！！（> < ヽ）

俺の意思は！？

「クソッ！またダブリやがった！」

俺は今買ったゲームにムカついている。

何故かというと、俺はまた同じゲームを買ってしまったからだ。

結局俺の所為なんだが、まあ、つまり自分にムカついてるだけだ。

どうやら、この流れだと俺がヲタク設定になるんだが、それは置いて、

このままだと、一人でブツブツ言ってる俺が恥ずかしい。

そんなわけで、自己紹介をしようじゃないか！

名前：折原 達也

・年齢：15歳

髪の色と瞳の色は、日本男児？なので黒だ。

んーと、後は情報になりません！！

と、まあこんなところだ。いたって普通だろ？
一点を除けば……

「さてと、腹も減ったし……あー材料ねーな、どっかのコンビニよってくか。」

ウィーン・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「イラッシャイマセ、折原達也さん。」

「あの～？もしもし～。」

「へ？、あつ、はい・・・なんで俺の名前を？・・・。」

「あつ！、いえいえ、そんな名前かな」と思っただけですから・・・
・あはは・・・」

この男絶対ウソついてやがる！！

と、心のなかで叫んだ俺だった・・・

そのあと、俺は適当に材料を買おうとしたのだが、レジに行くと、
またアイツだ。

「お箸いりますか？あ、それとも、新発売の「逃げ逃げジュース」

いますか？」

「どっちもいらねーよ！てかだれがそんな怪しいもん飲めるか！！」

「え！？、あ、今ならただなんで買ってください！お願いです！！

！」

「はあ？」

「お願いです！買ってくれないと怒られちゃうんです！。」

「ああ、もう分ったよ……はあ……」

「ありがとうございます！」

結局買ってしまった……

あの後、俺は家に帰った。

「ただいま……って、言っても無駄だよな」

俺は基本毎日一人暮らしだ。

親は……いない、生まれた時から……

俺は、孤児院の前に置き去りにされていた。

最初に俺を見つけた孤児院の警備員の人がすごく慌てていたらしい。なにせ、名前もなく、置手紙もない。

そんな俺を見て、同情でもしたのか孤児院のみんなはすごく優しくしてくれた。

係員の人も、孤児院にいた子供も。

でも俺は、誰とも仲良くなろうなんて思わなかった。

ちなみに、名前は見つけた警備員の人がつけてくれた。

だから俺は、作り笑いをし、みんな均等に関わった。

だから、みんな俺を悪い子とは思わなかっただろう、むしろいい子
と思っただろう。

そんなことをしているうちに、いつしか笑うことができなくなっ
ていた。

ほんとうの「笑い」が。

「はぁ・・・何やってんだろ俺。」

「ま、なんか飲もつと、って、さっき買ったやつしかないのかよ、
いいやもう。」

「逝け逝けジュース」いかにも怪しいな・・・しかも逝け逝けって・
」

ゴクッ

「うげっ、なんだこれ変な味だな。」

飲んだジュースの感想を言っていたら突然目の前が見えなくなった

な、何だこれ・・・うつ、・・・

「ん？なんだここ？・・・」

「あ、気づきましたか、さっそくで悪いんですが・・・」

こいつ誰だ？頭の上に輪つか？背中に羽？

「なあ、お前もしかして神様？」

「へっ？あつ、はいそうですけど何か？」

「何かって？ってお前！！・・・ん？、こいつさっきいた変な店員じゃ・・・」

「ゴメン異世界に逝ってクレ」

「は？おまつ何言って！？それに俺死んでねーし！」

「ダイジョブダイジョブ、僕が死んだことにしましたから」

「なんだよそれ！」

「あなたは、神に愛された者です。それに、生きても死んでもあなたは、同じでしょう？」

「ッ！・・・」

「これは、あなたにだけ与えられたのです。」

「まあ、問題はあなたがどうするかです。」

「わかってる、・・・でも俺は同じなんかじゃねえ、そう言うんだ

「だったら俺がその異世界で変わってやる! ! !」

俺の意思は!?(後書き)

嗚呼、どうしよ、ストーリィー

俺どうなっちゃうの!?(前書き)

更新遅くなってすみません!

俺どうなっちゃうの!?

「・・・もう、後戻りはできませんよ?それでもいいんですね。」

「ああ、それが俺の道だ、強くなれるなら、俺はもう・・・。」

「・・・分かりました、あなたの思いは本物のようですね。」

「なら、あなたが願う事を叶えて差し上げましょう、願いはなんですか?」

「誰かを、大切な人を守る力が欲しい。」

「!・・・分かりました!、いいでしょう!」

「?、何テンション高くなってるんだよ。」

「あなたが神に愛されたものというのがよく分かりました。」

「いいでしょう、あなたに転生する異世界での最強能力を与えましょう。」

「い・・・いいのか？・・・」

「いいですよ、他に何か願いはありますか？」

神様がニコニコした笑顔で聞いてくる

この顔は、何でも叶えますよの顔だな。

俺は・・・

「もうない。」

俺がそうキツパリ言うと、それを聞いた神様がポカンとした顔で、口を開けていた。

「ウツソン！？それだけ！？、普通、モテたいとか言うのに！」

「・・・？・・・？」

俺の行動を見た神様が、大きくため息をついて、言った、笑いながら。

「アハハハ、こんなの初めてだ！、さすが「神に愛された者」だね。」

「何かおかしかったか？」

「可笑しいも何も・・・、っと、もう時間だ、あとは僕が決めとくから。」

「あ、ああ・・・なあ、最後に聞いていいか？」
「ん？聞いていいよ、僕に答えられることなら、」

「・・・なんで・・・なんで俺なんだ？」

「！・・・・・・知りたい？」

「知りたい。」

「・・・どうして？」

「多分、それは俺が絶対知ってなきゃいけない気がするから」

「！ はあ・・・、つくづくあなたには驚かされます、いいでしょう
教えてください」

「それは・・・、」
「・・・だからです。」

「は？お前何言って」

「もう時間です、転生したらまた会えるでしょう、それではまた・

・」

「お、おい」

「俺なのか？」

ん、んう・・・・・・・・・・・・・・・・ん？

どこだここ？

俺は転生？された後、目の前には知らない天井があつた。

n？あれれ？こんなに俺の手って小さかつたけ？
いやいやイヤ、

しばらく俺が自問自答していると、ドアの開く音がした。

ガチャ

「あら、もう起きたのかしら　あなた、フエイが起きたわよ」

・・・・・・・・・・

「・・・・・・・・。」

「あなたと私離婚しちゃうわよ」

シュバ

「待ってくれ！マリアー！私を置いてかないでくれー！！！」

「ウソよ」だってあなた呼んでもこないんだもの」

「エエ！それだけで！？つか、夫も夫だな！

そう俺がツツコミをいれていると、ものすごく美形の男女が俺を見ている

「！ほら見てあなたと私たちに似て、綺麗よ」

「おお！？めっちゃ綺麗だな」

「それにしても、あなた、この子さっきから泣きもしないのよ、大丈夫かしら？」

「なに、大丈夫だろ、だって私達の子供だからな！！」

「ま、それもそうよね」

もしかして、俺はこの超美形の子供なのか！？

「オギヤーオギヤー（マジかよー！？）」

「あらあら、あなたの所為でフェイが泣いちゃったじゃない、」

「エ！私の所為！？」

「アラ、そうじゃないの？」

「ウー、すみマセン」

「フフフ」

あれから俺がどうなったかというところ、まあ……知らない方がいい……

俺どつなぢゃうの!?(後書き)

ダイジヨブ!お教えします~

俺の成長！？（前書き）

はは
mm
mm

俺の成長！？

「フエイ、ご飯よ」

「ああ、今行くよ」

あれから9年、もうすぐ俺は、10歳だ、
ちなみに、俺が前の記憶をもっていることは言っていない。

そして俺は9年間で見事に成長した

一つは、世界最強と言われた親を倒したことだ
” 5歳の時に”

一つは、もうすべての魔法をマスターしたことだ
下級魔法と中級魔法は、2歳で

上級魔法は、” 3歳で”

俺自身も驚いたくらいだ。

三つ目は、知力の覚えが驚くほど早かった

そしてもう一つは、父親にすべての剣術を教えてもらった結果、
奥義すべてマスターした

「お、来たかフェイ、お前に話がある」

「なに、父さん」

「うん、お前も、もう10歳になる、学園の話なんだが……」

「お前をセシル学園に入れようと思う」

「フーン」

「フーンてお前なあ」

「まあ、この子ならこの反応も珍しくないじゃない、ネ」

セシル学園とは、この世界の中で最大規模の学園だ、
そのためもあって、入るのは難しい、だが、試験を受けるものは年々増えていくばかりだ
前世からいえば、高校のようなものだ

「別にいいよ」

「ホラ、フェイもこう言ってるんだし、ネ、ア・ナ・タ？」

「あ、ああ、分かったよ、ま、フェイなら当然か」

「頑張りなさいよ、フェイ」

「……ああ……頑張るよ……」

「……」

「あ！そうだわ！、ミズキちゃんも受けるみたいよ」

「なんだそうだったのか！仲良くしろよ！」

「ああ……」

こうして一夜が終わった

「仲良くしろ」か……………」

ミズキは俺の幼馴染だ小さいころいつしよによく遊んだ
今も仲がいいとは言えるかわからない

「できんのか、俺に……………」

……………

今日はもう寝よう

「ふあ……………朝か……………」

「眠いけど、行くか」

俺は毎日行っているところがあるそれは

町から外れた古い図書館だ

町から外れていることもあって、めったに人はいない

尤も、家が町から少し離れているので俺にとっては好都合だ

加えて、俺は町に出たことがほとんどない

「うん、誰もいないから静かでもいい……」一人か……」

「今度町にでも行くか、ついでに久々にミズキに会つか」

俺の成長！？（後書き）

短いですズビバゼン！

俺の幼馴染！？（前書き）

くッ、短い！

俺の幼馴染！？

「ほらー、起きなさいミズキ！」

「ンー？はいはい、何お母さん？」

「ミズキ、あなた勉強は？もう10歳でしょう」

「いいの、いいの後でやるから」

「後であとで、ってあなたそう言いながらにもやってないじゃない」
「い」

「分かったよ、もう」

「どうかしらね」

「いいからもう乙女の部屋から出て行って！」

「何言ってるんだか」

バタンッ

「もう、分かってるてば・・・」

とは言いつつも、さすがにヤバイ、

勉強は昔から苦手だったものの、このままじゃヤバイ。

このピンチの中あたしは自分の幼馴染を思い出す。

「はぁ・・・フェイ・・・どうしてるかな・・・」

フェイとは、あたしの小さい頃からの幼馴染だ

フェイはいつもすごかった、2、3歳で上級魔法と剣術をすべてマスターした

それはフエイには当然だったのかもしれない、なにせ親同士が世界最強と言われたほどの魔術師と剣術師だからだ

その事もあって、フェイは5歳でその世界最強と言われた二人を倒したのだ

フェイにこそっり聞いたらフェイには魔力が多すぎだということだ
そうだ

そして、フェイが超がつく美形なのだあれ以上なんて見たことがないこの国の王子よりも美形なのだから

「フエイ……」

「キヤ————！！！！！！」

「なっ、なに!？」

「ミズキ！フエイ君が来てるわよ！！」

「え！？フエイが！？」

あたしは慌てて階段をおりた

彼が、どんな風になったか知らずに。

あたしは彼を見ただもあたしは動かない、いや動けなかったのだ、さっきの悲鳴の意味が分かった

” 成長した彼に見とれて ”

あたしに気付いた彼があたしを見て話しかける。

「久しぶり、” ミズキ ”」

あたしはただ彼に自分の名前を呼ばただけなのに顔が熱くなった。

「ひ、久しぶり・・・フエイ・・・」

「どうしたんだよ、ミズキ？」

「ヘッ！？あ、イヤなにも・・・」

「？」

「でっ、でもなんでいきなり来たの？」

「ああ、ミズキに会いに」

笑顔で言うからにまたしても見とれた

「へ？あたしに会いに？ほっ、ほんと？」

「うん」

「それにしてもミズキ成長したなあ」

いやいやそれはあなたの方でしょう

「そういえばミズキもセシル学園に行くんだってな」

「も？ってことは、フエイも！？」

「うん、そうだよ”俺も”」

そんな笑顔で言われたらどうすればいいのー！

「これから頑張ろうな”ミズキ”」

このときまたあの悲鳴が聞こえた

さっきよりもデカく聞こえた気がした

俺の幼馴染！？（後書き）

今度からガンバリマス・・・・・・・・ウン

キット・・・・・・・・

突然の事！？（前書き）

ほんとすみません！！！！
めちゃくちゃ遅れました！！

突然の事！？

「フエイ、ミズキちゃんに、ちゃんと会ってきた？」

「ああ、会ってきたよ」

「それで？どうだった？」

「どうだった、ってなにが？」

「母さん、フエイに聞いても無駄だと思うけど・・・」

「あら、そんなことないわよ」

「？」

「・・・・・・・・・・やっぱりダメね」

「だろ・・・」

「なにが？」

「いや、なんでもないよ・・・」

なにで父さんと母さんは、ため息ばかりつくのだろうか

俺には分からない、いや分からなくていい・・・・・・・・

「じゃあ、行ってくるよ」
「行ってらっしゃい」

俺はまたあの図書館に向かった。

「ん・・・・」

「あれ、寝ちまつてたか」

気づくと外はもう日が暮れていた
これはさすがにヤバイと思った俺は、歩いて帰るのも面倒なので、
転移魔法を使った。

「我が望む場所へ 我を導け」

目を開ければもう自分の部屋だ

「魔法って便利〜」

「さてと、どうしようか……」

帰ってきてやることがない、つまり暇だ

「特にないからな……！、よしネヨウ！」

ウン、寝よう！なんか寝なきゃいけない気がする寝ないと、

「フエイ〜？起きてる〜？」

と、母に起こされる始末になるからだ。

そして、「親と戦う」ということになるのはもう御免だ。

だが、今日は違った。

違ってしまった。

嗚呼、どうすればいい？

俺は幼馴染に寝ているふりをしてる時に、部屋に入られたらどうすればいい？

「フエイ、起きてる？」

「・・・」

「フエイ？」

「・・・」

「寝てるのか・・・なら、いいよね？」

は？！何がいいの！？エ、ちょ、なに、何なのねえ！？つか、なんでいんの？！

「フエイ・・・」

「・・・」

「あのね、フェイ、あたしフェイが幼馴染でよかったよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・？」

「フェイがどう思ってるかは分らないけど、でも・・・・・・・・これだけは言わせて？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ありがとう」

もう無理です。

バサッ、

「へ?!なんで・・・寝てたんじゃ、」

「ん・・・・・・・・じゃあ、おはよう？」

「ちょ、とぼけないでよ!どこから起きてたの？」

「全部」って言ったらどうする?」

「っ!／／／／／」

「~~~~」

ミズキは優しい、

こんな俺にこんな言葉まで言ってくれる。

「ありがとう」

「・・・・・・・・うん・・・・・・・・」

「でも、なんでミズキがいるんだ？」

「ああ、フェイに勉強を教えてもらうために、泊りにきたのよ？」

「へえ．．．って、泊り!？」

「う、うん、おばさんから聞いてない？」

「ぜ、全然!!」

「ったく!何なんだよホント．．．」

「ま、お願いね?先生」

「はあ．．．」

俺にできるのか?
気が重いぞ．．．

突然の事！？（後書き）

すみませんでした・・・PCが壊れてしまいました。
すみません、これから、ちゃんと投稿しますので
お願いします！！（>*<）∴∴

5年も!?(前書き)

今回はちょー短いです・・・m
()m

5年も!?

なあ、もし幼馴染がバカだったらどうする?

「なんでこんなことも分かんないんだ?」

「な、ナンノコトカさっぱりねゝゝゝ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「な、なんで黙るの・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ああ!もう!そうです、なにもやらなかったんですー!」

「やっぱりか・・・・・・・・」

「うう・・・・・・・・」

今、俺はミズキに勉強を教えている。
はずだったんだが……

ミズキはどうやら、なにも勉強していなかったらしい。

「こんなんで、よくセシル学園に入ろうと思ったな」

「ただでさえ、試験者が多いっていうのに……」

「だ、だって！魔法は得意だし……大丈夫かなって……」

「おいおい、確かにミズキは魔法が得意だが、試験は魔法だけじゃないんだぞ？」

「う……」

「ま、お前セシル学園に入りたいんだろ？」

「うん……」

「だったら、俺が教えてやるから、ちゃんと勉強しろよ？」

「うん！」

こうして、俺がミズキに勉強を必死に教えたため、なんとか試験ができる状態になった。
でも、ここまでくるまで、5年もたっていたことを知った時は、俺とミズキは笑っていた、

もちろん、その時は俺の笑顔がどんなものだったなんて知らないほうがいい。

試験の日！？（前書き）

更新が遅くなってすみません・・・m
（
m

試験の日!?

「いつてらっしゃい」

「行ってきます」

「忘れ物ない?」

「ないって」

「でも・・・」

「母さんもいいだろ?」

「あらゝそんなことないわよ」

「・・・・・・」

なんなんだ、早く行かしてくれ。

「行ってきます!!」

俺は、待っているミズキのことも待たせるわけもないので
急いでミズキのもとへ走った。

今日はセシル学園の試験の日だ。
ありえないことに、俺は試験の前に親と戦う羽目になった。
おかげで俺の精神はボロボロだ。

そんなことを思い出しながら走っていると、
俺に気付いたミズキがこっちに振り返って、手を振っている。

「ごめん、待ったか？」
「う、ううん！大丈夫！」
「そうか、じゃ、行くか」
「うん！」

俺達は、試験を受けるセシル学園に着いた。

「はぁ．．．．．」

「どうした？ミズキ」

「大丈夫かな、試験」

「大丈夫だろ、『5年』もかかったんだから」

「う．．．．それを言わないで．．．．」

「ごめんごめん」

「．．．．．」

「ミズキ？」

「フェイ．．やたらと視線を感じるんだけど．．．．」

「みんなお前を見てるんじゃないか？」

「フェイ．．．．」

「？」

ミズキはため息をついて、俺の手を引っ張って学園の中に入っていた。

試験会場に入ると俺達は別れた。

「ここか……」

「あの、」

「ん？なんだ？」

突然声をかけられて振り返ると、瞳と髪がセピア色の美少女がいた。

「ここ私の席なんですが……」

「ああ、そうでしたか、すみません」

俺がそう返すと、その子は顔を赤らめた。

あ、あと基本俺は初対面の人には、僕系で。

「大丈夫ですか？熱でも？」

「あ、いえ……／＼／＼」

「ほらー、自分の席につけー」

教師らしき人が入ってきて、試験用紙を配った。

「――説明は以上だ。では――」
「始め――」

一斉に鉛筆の音が鳴り響く。

さて、俺もやるか。

C

○

○

○

○

○

○

試験が終わる頃にピッタリ起きた俺は時間がたつのを待った。
少し待っていると教師らしき人が、終わりの合図を告げ、それを聞いた受験者達は、受験会場から出て行った。

「さて俺も、行くか」

試験の日!?(後書き)

感想や、誤字のお知らせ受け付けますのでヨロシクデス。

更新は、主に土日になります。

更新が遅くなった場合そこは、優しく受け流してください

すみませ「誤っても無駄だ」↑(フェイ)

試験に宣戦布告！？（前書き）

長らくお休みしてすみませんでした。

これからは「遅い」ハイ、すみませんm——m

そして短いすめっちゃ。

試験に宣戦布告！？

俺は、学園の外に出ると既に外で試験の終わったどんよりしたミズキがいた。

「・・・大丈夫か？」

「もう・・・だめ・・・終わったわ・・・」

「あたしの人生短かったけど「待て」

「そんなに悪かったのか？」

「うつん・・・そういう訳じゃないんだけど・・・」

「？じゃあ何なんだ？」

「実は、試験の時に宣戦布告されちゃって・・・」

「・・・一体どうやってたら宣戦布告なんてもんされるんだ」

「うつん、なんとなく？」

「なんとなくで宣戦布告されるか！」

「で、でもされちゃってるし・・・」

「はぁ・・・で、相手は？」

俺は諦めミズキの話を聞くことにした。

「女の子なんだけど・・・何か、実技の試験で自分に負けたら仲間にしてあげるみたいなの？」

実技とは、魔法、魔力の試験のことだ

「はあ？負けたらって・・・無視しろ、うん、それが一番いい」
「え、でも・・・」

「じゃあ、ミズキはそいつらの仲間になりたいのか？」

「いや」

「即答するくらいなら、そんなの無視しろ」

「うん・・・」

「もし、復讐とかそいつらが企んで来たら、こっちも・・・」

「それは、やめてください」

フエイは、本当にやりかねそうになかったのでやめさせた。

「明日は実技の試験か」

「実技ならいける！！」

「おまえそれ言ったら、執筆の試験がダメだったみたいじゃないか」

「あははは・・・」

「・・・まあ、実技なら心配なさそうだな」

「魔力も、魔法もミズキは得意だもんな」

「まあ、フエイほどじゃないけど」

「そうか？」

「・・・・・・」

何故かそのままミズキは帰るまでため息をついていた。

「暴走しないといいんだけど・・・」

俺はそんな言葉をはいて明日に備えて寝た。

試験に宣戦布告！？（後書き）

暖かい目で・・・「無理だな」ハイ、ソウデス。

「まあ、こんな、作者ですが付き合ってやってください」

！ありが・・・「いつでも見捨てていいんで」・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6284x/>

俺（僕）の神様！？

2012年1月3日17時59分発行